

経済地理メモ — 社会主義国編 —

② 東ドイツ

資料情報係
Information Service Section

国名 ドイツ民主共和国 (Deutsche Demokratische Republik)

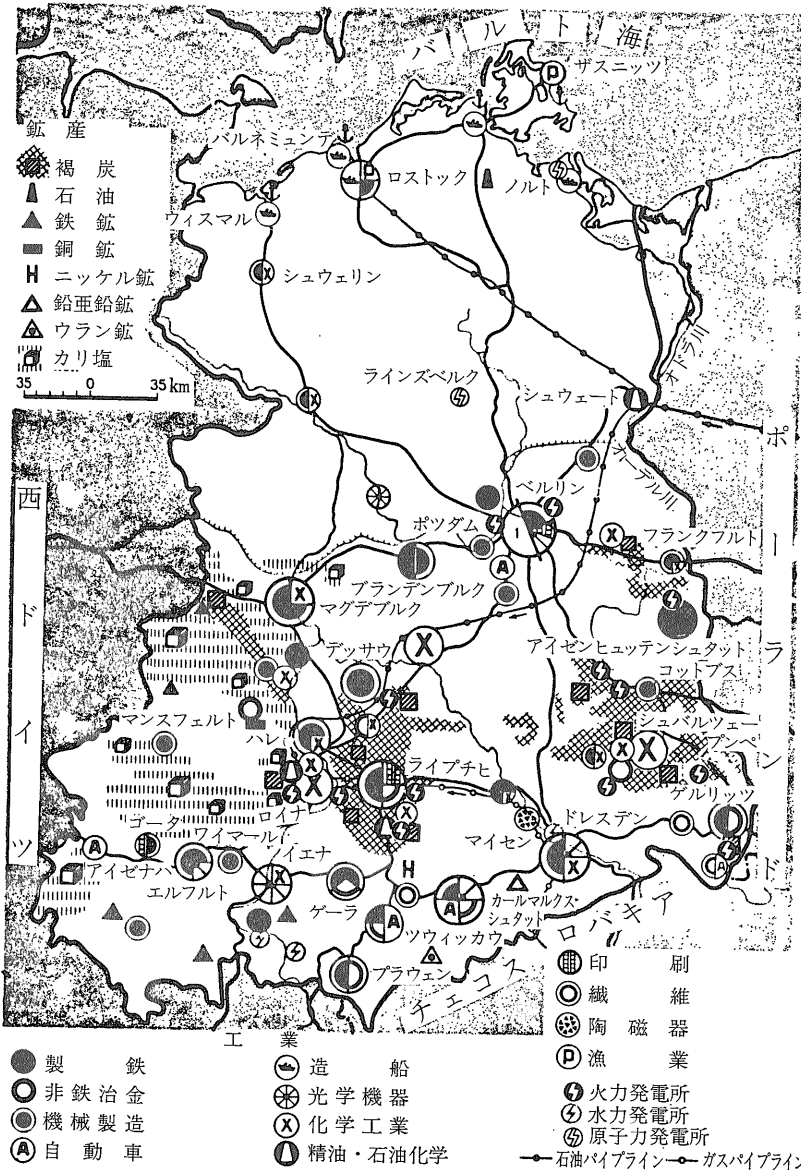
国土

東ドイツは旧ドイツの東部にあり その面積は旧ドイツのほぼ30%に相当する。南限の緯度は我が国の北限よりも約5°北に位置する。

面積 10.8万km²

人口 1,700万人

首都 ベルリン (Berlin)



第1図 東ドイツの鉱工業配置

経済地理的な位置

東ドイツの位置には 4つの特徴がある。 第1は多くの鉄道・自動車道・水路・空路が交叉するヨーロッパ中心部に位置し 東西ヨーロッパ スカンジナビア半島から地中海を結ぶ要路となっていること 第2はバルト海を通じ 世界の海路につながっていること 第3は ポーランドとともにオーデル(Oder)河の水運が利用できること 第4は 東ドイツの重要経済圏を600kmにわたって横断するエルベ(Elbe)河が北海への出道となっていることである。

人口

戦後 ポツダム会談のとり決めにしたがって東および南東ヨーロッパの諸国から東部ドイツに400万人以上のドイツ人が移住し 東ドイツの大きな人的損失を補った。 それでもほかのどの社会主義国にも例をみないほど 東ドイツでは中年の労働能力の高い年代(とくに男性)の割合が低く 高年令層が多く 女性が男性よりもはるかに多く 人口の自然増加率はきわめて小さい。したがって 東ドイツでは労働力の不足がいちじるしい。その不足は 資格の高い要員の労働生産性をたえず向上させることによって補なわれ そのうらづけとして 技術革新の成果が広く活用されている。

東ドイツの平均人口密度は ほかの社会主義国のどこよりも大きい。 その中でも 経済成長のいちじるしい鉱物資源の豊かな 農業にも適した条件を備えている南部諸県がとくに人口密度の高いところである。

東ドイツの一つの特徴は 人口の都市集中度が高いこと 総人口の76%が都市に住む。 都市は 南部と南西部に多く 北部には少ない。 労働人口中の農民と労働者・勤労市民・知識人などの比率は およそ1:4で

この比率も東ドイツの一つの特徴といえる。

経済の全般の特徴

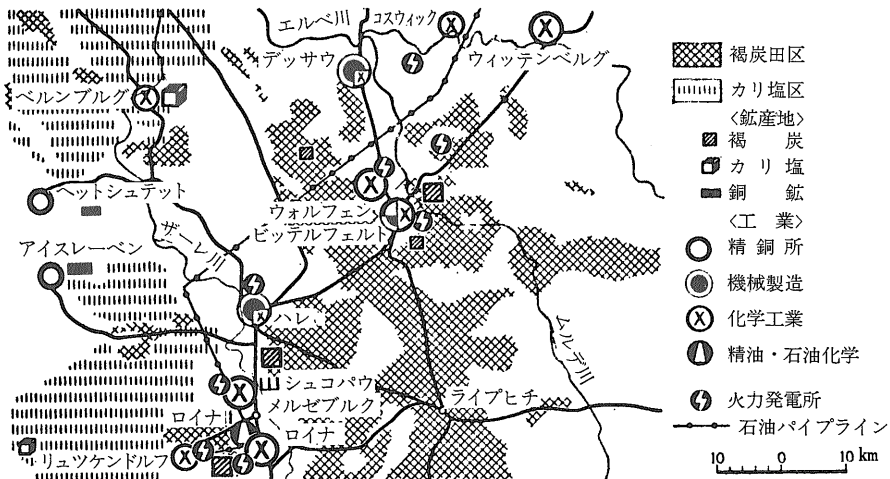
旧ドイツの分割によって生れた東ドイツには 炭鉱も鉄鉱山も製鉄所も重機械・工作機製造の大型工場も化学工業の中心部門もほとんど存在しなかった。 それは 主として西ドイツの地域に残った。 かつて一つのドイツ経済であったものが 数千の小生産圏にひき裂かれた。 これらのすべてが 筆舌につくせない困難を生んだ。

しかし 社会主義諸国 とくにソビエトの大きな援助もあって 東ドイツは鉱工業の復興に成功し さらに早いテンポで発展し 現在では 東ドイツだけで1936年のドイツ全体の鉱工業生産をはるかにこえている。 現在の東ドイツは 鉱工業の総生産量で世界第10位 人口1人当りでは世界有数の国である。 世界総人口の0.5%にも満たない国で 鉱工業生産は2%を少しこえている。 東ドイツ経済の中心は工業で その生産物の総価格は農業生産物の総価格の5倍をこえる。 経済相互援助会議加盟国が輸入する電気機器・精密機械・光学機器・実験機器の1/3は 東ドイツ製である。

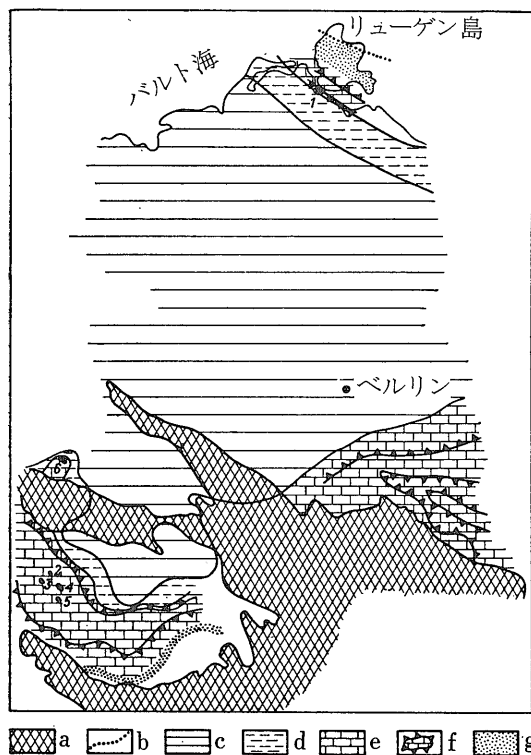
鉱業

東ドイツは 褐炭 カリ塩 銅鉱 ニッケル鉱 ウラン 鉱の資源に富む一方 クロム鉄鉱とボーキサイトの鉱床がなく 石油と天然ガス 無煙炭・瀝青炭 鉄鉱などに乏しい。 水資源も少ない。 国内の鉱物原料資源とエネルギー資源の自給率が低いこと (および労働人口の不足) は 東ドイツの鉱工業の泣きどころである。

東ドイツのエネルギー資源の主体は 褐炭である。 世界で褐炭が東ドイツほど大きな役割をになっている国はどこにもない。 褐炭炭田は 南部と南東部に分布する。 主な褐炭層は いずれも分布深度が浅く 炭丈



第2図 ハレ化学工業地帯 鉱工業配置



第3図
東ドイツ ツェヒシュタイン統スタッスフルト炭酸塩層相・油田・ガス田分布要図 (Münznberger など 1966)

- a—先ツェヒシュタイン統分布域
- b—スタッスフルト炭酸塩層境界
- c—ボニュシフ頁岩発達域
- d—ボニュシフ頁岩の苦灰岩漸移域
- e—苦灰岩発達域
- f—苦灰岩層厚 ≥ 25 m域
- g—スタッスフルト炭酸塩陸源層発達域

図上の数字

- 1—ラインケンハーゲン石油・ガス田
- 2—マオルケンローダ石油・ガス田
- 3—ミュールハウゼン石油・ガス田
- 4—キルハイリンゲン-アルメンハウゼン天然ガス田
- 5—ランゲンザルツァ天然ガス田
- 6—ファールシュタイン石油・ガス田

が厚く 露天掘で採炭されている。東ドイツはこの褐炭をそのままの形で使用するだけでなく ブリケットや可燃ガスに変えて 工業用燃料 都市ガス 火力発電用燃料として広く使用している。東ドイツでの褐炭の生産量は2.5億t前後で 世界の褐炭生産量の1/3を占め もちろん世界一である。しかし 東ドイツの燃料エネルギーバランスは 石油パイプライン「ドルー ジュバ (友好)」とガスパイプライン「ソユース (同盟)」を通じてソビエトから供給される石油と天然ガスの使用によって また 核燃料資源の活用によって 次第に変化している。なお 東ドイツでは すでにライズブルク (Reinsburg) とノルト (Nord) の原子力発電所が稼働し さらに新設計画が実行に移されている。

製鉄所は 主に輸入原料によって操業されている。

戦後 東ドイツはアイゼンヒュッテンシュタット (Eisenhüttenstadt) に製鉄-貫コンビナート「オスト (Ost)」を建設し ポーランドから石炭とコークス ソビエトから鉄鉱の供給をうけ 操業している。戦前からの旧式製鋼所は改造・拡張され 主に高品質鋼と圧延鋼を生産している。

非鉄金属製錬所は南東部 エルツゲビルゲ (Erzgebirge) にそったプラウエン (plauen) などにあり 銅 鉛 亜鉛やアルミニウムを製錬している。

日本との関係

東ドイツは1973年9月に国連に加盟し 我が国との国交が正式に開けたのも同年の5月15日のことである。したがって 我が国と東ドイツとの貿易も国としては歴史が浅く 通関統計によると 1977年の実績は往復6,037万ドル (世界との貿易総額の0.04%) 日本の輸出が4,262万ドル 輸入が1,775万ドルにすぎない。

文 献

- 1) В. Т. Исупов (1974): Германская Демократическая Республика: Москва, Издательство "Наука"
- 2) Справочник: Германская Демократическая Республика: 1979, Москва
- 3) В. П. Максаковский (1979): Экономическая география зарубежных стран: Москва, Издательство "Просвещение"